

六本木の思い出

請川 雅春

昭和五十五年四月、今から四十年前の六本木は現在とは様相の異なる街であった。活気に溢れた歓楽街のイメージが強い新宿とは異なり、また、ネオンの輝きが眩しい高級クラブや料亭のイメージが強い赤坂とも違う街であった。時代は昭和五十四年のイラン革命を契機に始まった第二次オイルショックがピークに達した時期であり、昭和六十二年から始まるバブル景気を少し遡る時期であった。

当時の六本木には、「瀬里奈」に代表されるような高級飲食店が林立していたが、その存在感を主張するような豪華な店構えはなく、ひっそりと佇んでいる店が多かった。また、会員制の高級クラブやバーも多数あったが、眩しいネオンや派手な看板が掛かっているわけでもなく、ビルの一角になりを潜めて佇んでいた。当時流行っていたディスコ店は、ディスコビルと称される六本木スクエアビルは有名であったが、誰かにこのビルがそれだと言われない限り、気付くことはなかった。

ぼくはその頃、この六本木の街で一日の半分以上を過ごしていた。それは、オールナイトの

ディスコで夜通し踊っていたわけではなく、クラブやバーで朝まで飲んでいたわけでもなくて、朝八時前には出勤し、夜は九時過ぎまで仕事をしていたのである。今では、「東京ミッドタウン」となっている場所であるが、当時は不夜城と呼ばれる防衛庁本庁があった。住所は六本木ではなく「港区赤坂九丁目七番四十五号」であり、自衛隊の中では「檜町駐屯地」と呼ばれる場所ではよくは勤務していた。

防衛庁本庁には、防衛庁長官を直接補佐する「内部部局」、陸海空各自衛隊の中核である「陸上幕僚監部」、「海上幕僚監部」、「航空幕僚監部」、自衛隊の装備品を購入する「調達実施本部」、米軍と調整する「防衛施設庁」などがあつたが、その中で多くの勤務場所は「陸上幕僚監部」であつた。そこで、昭和五十五年四月一日から防衛庁事務官として勤務していた。勤務を始めて驚いたのは、ここで働いている人の殆んどは制服を着た自衛官であり、中央省庁のイメージとはかなり異なっていたことであつた。ぼくの隣の机で仕事を細かく教えてくれる人は事務官であつたが、直属の上司である班長、その上の

課長、部長はすべて自衛官であつた。自衛官の制服には階級章が付いており一目でその人の偉さ具合がわかるので、どこにいてもすぐに分かるという利点があつた。自衛官の高級幹部が歩いていけば遠くからでも階級章が見え、自分の階級との差がすぐわかるので、自衛官は立ち止まって敬礼を行うのが常であつたし、僕たち新人の事務官でも失礼な態度をとることはなかつた。ただ、階級章を付けた制服の本来の目的は、混乱した戦場でも指揮系統をはっきりさせるために上下関係を明らかにすることと、敵味方を瞬時に見分けることにあるようだ。ただ、この「檜町駐屯地」では、高級幹部の自衛官が多過ぎて上官とすれ違つた際に立ち止まって敬礼をしていると動けなくなるので、敬礼している自衛官はあまりいなかった。

ぼくが勤務する「陸上幕僚監部」とは、全国に展開する陸上自衛隊を統括する組織であり、「防衛計画の大綱」という日本の安全保障政策や防衛力の規模を定めた指針に定められている数の戦車やヘリコプター、小銃などの装備品を購入して全国の部隊に配備したり、全国にあ

る陸上自衛隊駐屯地を維持管理するためのお金を配分したりする業務を担っている。また、各駐屯地の重要な幹部自衛官の配置を含む人事管理も「陸上幕僚監部」が担っている。つまり、全国陸上自衛隊の「人」「物」「金」の権限を「陸上幕僚監部」が握っているわけだ。海上自衛隊や航空自衛隊も同様に「海上幕僚監部」や「航空幕僚監部」という統括組織を持っている。こちらは、海では自衛艦、潜水艦や対潜哨戒機、空では戦闘機、輸送機や対空ミサイルなど陸上自衛隊とは予算規模の違う装備品を持っている。

ぼくの配属先は「陸上幕僚監部監理部法務課」で、ぼく個人の仕事は全国の自衛隊を含むいろんな部署から送られてくる法務関係の行政文書を記録、整理、分類するとともに必要な個人に引き渡す「文書管理」業務であった。ただし、まだ新人なので課内の雑用も一手に引き受けており、その業務の拘束時間が長かった。雑用のひとつに、月に一度の給料日に現金を袋詰めする作業があった。

その日は出勤してすぐに会議室への集合を命ぜられた。会議室には各課から集められた十数名の若手事務官が集合していたが、その半分はぼくと同期の新人事務官で顔見知りであっ

た。会議室の真ん中に十脚ほどのテーブルが集められており、その周りの椅子に座って作業するようにになっていた。その一角に現金が入っているジュラルミンケースが置いてあった。後で聞いた話では、現金を扱う担当者が日本銀行から直接運んできたということであった。

今日の袋詰め作業の責任者である総務課の先輩事務官が口を開いた。

「皆さんご苦勞様です。今日はこの作業が初めてという人がいますので、作業手順を簡単に説明します。給与袋は課ごとにまとめていますので、ひとつの課を全員で袋詰めして、その後金額に間違いがないかどうかを点検して各課の手提げ金庫に収納する流れで行います。紙幣だけではなくて小銭も一円単位で入りますので間違わないでください。最終的に金額が合わなくなると各課の金庫を一つずつ点検し直すなくてはならないので相当時間がかかってしまいます。くれぐれも慎重に教えてください。先月、給与が手元に届くのが遅いというお叱りがありましたので、午前中には作業を終わらせたいと思いますのでよろしく願います。」

そう言って最初の課の給与袋を配り始めた時には、同期の事務官仲間の表情が緊張するのが分かった。自分が間違うともう一度最初から

金額を数えなおさなければならぬ。それは、大きなプレッシャーであった。全員、黙々と作業に没頭していたので話し声がなかったが、時々声が上がった。

「五円玉が入っていません。」

さっと全員に緊張が走った。間違ったのは、ぼくじゃないよと思った。しばらくしてまた声上がる。

「十円玉と五円玉を間違えていました。すみません。」

ふっと、誰かのため息が漏れた。

最後の課の袋詰めが終わりに、ジュラルミンケースの中の現金が一円の余りもなくなった時には全員安堵の表情をした。責任者の先輩事務官が立ち上がって言った。

「皆さん、ご苦勞様でした。皆さんの頑張りで一円の間違いもなく給与を数え終えました。おかげで、最初の目標であった午前中に給与を配り終えることができました。ご協力ありがとうございました。」

そこで全員を見回して言葉を続けた。

「ここで皆さんにお願いがあります。気が付いた人もいたと思いますが、今袋詰めした給与袋は全員分ではありません。半分くらいです。」

確かに、法務課全員分の袋はなかった。

「残り半分は銀行振り込みの手続きをしていただいていますので、この作業をしなくても給与が届きます。皆さん方が課に帰ったら是非、課員の皆さま方に給与の銀行振り込みの手続きを勧めてください。全員が銀行振り込みになりましたら、月に一度のこの作業がなくなりません。それだけではなく、この大きなジュラルミンケースを持って日本銀行に現金を取りに行く人の負担もなくなります。大きな業務改善につながりますのでよろしくお願いします。本日はお疲れ様でした。」

そう言って締めくくった。今では給与の銀行振り込みは当たり前となっているが、当時はまだ現金給付の慣習が残っていた。そういうぼくも、まだ銀行振り込みの手続きをしていなかった。就職前の学生時代は札幌に住んでいたため、多くの銀行口座は札幌の地方銀行にあった。この口座に給与を振り込むと、現金の出し入れが不便になる。今のぼくの生活圏に、この銀行を見かけることはなかったのだ。

その日の昼休みに銀行口座を開設するためにぼくは銀行に向かった。通勤する時に見かけた六本木交差点の一角にある有名都市銀行しか思い浮かばなかった。窓口で新規口座の開設をしたい旨を告げると、身分証明書があればすぐ

にできるとのことだったので、渡された申請書類に住所氏名等を記入して窓口の担当者に渡した。担当の女性は、記入事項を確認してからぼくを直視した。

「身分証明書をお願いします。」

そう言って、ぼくが差し出した運転免許証を受け取った。そして、申請書類に何かを書き込んだ後、免許証を返してくれた。

「当行の預金口座には自動的に定期積立できるサービスがあります。」

そう言うてから、もう一度顔をあげて「定期積立制度」の説明を始めた。流れるような説明ではあったが、そんな説明を受けるとは全く予想もできなかった。時々笑みを浮かべながら説明を続ける彼女の表情を眺めながら、「目鼻立ちのはっきりした都会のお嬢さんだなあ」とか「銀行といってもここは六本木だ、きれいな人が対応してくれるんだなあ」とぼんやり考えていた。彼女の説明は続いていた。

「毎月自動的に普通預金から定期預金口座に回っていきますので、意識しなくても定期預金が増えていきます。気が付けば何十万円と定期預金が増えていきますよ。定期預金は普通預金より金利が高いし、貯金額を増やすいい機会なの

では是非契約ください。お勧めです。毎月の積立額は千円からできますのでお手軽です。いかがですか。」

歯切れのいい説明ではあったが、ぼくはその内容を殆んど理解していなかった。そんなぼくの様子を見て契約するかどうか迷っていると、思ったのか、彼女はさらにぼくの予想を裏切る言葉を発した。

「やっちゃえ、やっちゃえ。」

ぼくは、ここが銀行の窓口であることを完全に忘れた。いや、そうとしか思えない回答をしていた。誓ってもいいが、普段でも決してそんなことは言わないし、言ったこともない言葉を発していた。

「お昼のランチをつきあつてくれるのらないよ。」

彼女は、一瞬だけ「えっ」という表情をしたが、

「じゃあ、決まり。」

と言って、視線を落として書類に何かを記入し始めた。ぼくがまだ事情を充分理解できないまま待っていると、彼女から新規に作成した通帳と本人控えの書類とを一緒に手渡してくれた。その一番上に彼女の名刺が乗っていた。「○銀行六本木支店、主事、山崎玲子」と書かれ

てあった。

「ご新規の口座開設ありがとうございます。あなたの連絡先は申込書に書いてもらいましたので大丈夫です。」

何が大丈夫なのかよくわからなかったが、そう言っただけでいくらの笑みを返してくれた。ぼくは、新規口座申込書に自宅住所と一緒に職場の連絡先も記入していたことを思い出していた。ぼくの銀行口座新規開設と毎月の定期積立五千円の手続きが完了した。

職場で、給与の銀行口座振り込みの手続きを無事終えて数日が経っていた。ぼくは、まだ仕事に不慣れなため、正面の仕事をこなすだけでなく、精いっぱい毎日のを送っていた。そんなある日、目の前の電話が鳴った。法務課の代表番号の電話は僕の目の前に置いてあったので鳴ることが多かった。

「外線から電話が入っています。」

防衛庁代表電話の交換手からであった。

「つないでください。」

カチツという切り替え音の後、

「〇〇銀行六本木支店の山崎と申しますが、川田さんはおられますか。」

川田とはぼくのことであった。

「はい。私ですが。」

「先日、お約束した山崎ですが。」

ぼくは、息をのんだ。少しの期待はあったが、本当に連絡がくるとは思っていなかった。

「この間はお世話になりました。」

それだけ言うのが精一杯であった。周りでは制服を着た自衛官がたくさん仕事をしていて、ぼくは新人であった。

「覚えていますか。」

「はい。本当に連絡いただいたので驚いています。」

「今日はシフトで昼休みが普通にとれますので、ランチ大丈夫ですけど。」

「ありがとうございます。こちらも大丈夫です。」

そう言うのが精一杯であった。声が上がっていたかもしれない。ぼくの様子が分かったのか、彼女は手短かにしゃべった。

「じゃあ、うちの銀行の向かいの誠志堂っていう本屋さん、分かりますか。そこで十二時頃お待ちしています。」

「はい、分かります。必ず行きます。ありがとうございます。」

誠志堂書店は何度か入っていたので場所は知っていた。当時の六本木での待ち合わせ場所の第一位が喫茶店のアマンド前、そして第二位が誠

志堂書店というのが定番だったらしい。

「それじゃあ。」

そう言って電話が切られた。彼女から本当に連絡が来たという事実が信じられない思いでいっぱいだった。銀行の営業活動の一環かも知れないという疑念がないではなかったが、ぼくは素直に喜んでいった。

誠志堂書店には十二時の五分前には着いた。それ程広くない店内を見渡すと、雑誌コーナーの辺りに既に彼女の姿があった。急いで近づき声を掛けた。

「お待たせしました。」

当然ではあるが、彼女は、薄手のベージュ色のカーディガンを羽織っており、銀行の窓口で見たブルーの制服姿ではなかった。

「早かったわね。昼休みのお店はどこも混むからすぐに行きましようか。私の知っているお店でいいかな。」

「はい。お願いします。」

ぼくは、六本木の街で食事をしたことがなかったものでそう言うしかなかった。彼女は慣れた足取りで誠志堂書店から出てから路地を二回ほど曲がった小さなビルの二階の和食店に入っていた。テーブル席が十卓程あり、奥に座敷もある中規模の店であった。もしかしたら有

名な店かも知れないが、ぼくはこの店の名前を知らなかった。待たされることもなくテーブル席に案内された。彼女が頼んだランチメニューと同じものをぼくが注文し終わると、彼女はほつとした表情をした。

「席が空いていてよかったわ。このお店は結構有名なのよ。昼休みは一時まででしょう。遅れて帰るわけにはいかないものね。あなた新入社員でしょう。」

そう言って悪戯っぽく微笑む彼女の笑顔を見ながら、官庁でも社員と喋っていいのかなあと思いつつ返事をしていった。

「はい。そうですが何で分かるんですか。」

「四月のこの時期は、通勤電車とか街中の新入社員は雰囲気分かるのよねえ。なんでかよく分からないけど新入社員オーラが出ているみたい。ピカピカのスーツのせいかも知れないし、希望に満ちた表情のせいかも知れないわ。」

この人の新入社員時代はいつだったのか気になったが聞くことはできなかった。

「あなたはそれに加えて新規に銀行口座を作ったんだから、新入社員のダメ押しよ。」

ぼくは、ふと気づいた。今の彼女は、定期積立預金の説明をしていた彼女ではなく、(やっちやえ、やっちやえ)と言った時の彼女であった。

「この間はすみませんでした。不躰なお願いをして、ご迷惑ですよ。」

「迷惑なら電話してないよ。あなた、変わってるね。」

そう言って、また笑った。注文した「すき焼き御膳」が運ばれてきた。メイン料理のすき焼きは固形燃料が付いた鍋で温められており、酢の物の小鉢と漬物の小皿、ごはん茶碗とみそ汁のお椀が上品に並べられた配置は、旅館で出される夕食のお膳を思わせた。

「ここは、浅草の老舗のすき焼き屋さんが最近六本木に出店してきたお店でね、おいしいと評判だったので、銀行の同期の子たちと時々一緒に食べに来るのよ。」

ぼくは、すき焼きの肉を口に入れた時、思わず「うまい。」と言っていた。

彼女は饒舌であった。銀行の窓口業務は、いろいろなお客さんと対応しなくてはいけないのでけっこうな激務であること、銀行は午後三時に閉店するがそれからまだまだ仕事が続くこと、六本木支店の同期の女の子は一人しかいなくて相当仲がいいこと、支店長代理という役職の直属の上司はやさしくていい人であるが奥さんに弱いこと、さらにもっと上の副支店長は怖い顔をしているが実は世話好きで気が弱

いことなど、彼女の銀行の話題は尽きなかった。彼女がしゃべって、ぼくが相槌を打つ構図のまま、あつという間に時間が過ぎた。

「新入社員が昼からの仕事に遅れるとまずいから、行きましようか。」

そう言って伝票を手に取りうとした彼女より先に、ぼくが伝票を取った。

「ぼくが誘ったので支払わせて下さい。」

ここだけは譲れなかった。

「じゃあ、ご馳走になります。ありがとうございます。でも、次は割り勘にしましょうね。」

えっ、次があるのかと嬉しくなってきたが表情に出ないように頑張った。

それからは、二週間に一度の割合で彼女とのランチが続いた。彼女はいろいろな店をよく知っていた。最初に行った和食店以外にも天ぷら専門店や串揚げ屋などの和食の店を多く知っていたし、それ以外にもイタリア料理店、中華料理店、焼き肉店にも連れて行ってもらった。瞬く間に数カ月が過ぎていた。

その日はイタリア料理店でパスタランチを食べて、食後のコーヒーを飲んでいった。

「お願いがあるんだけど。」

銀行の営業かなと思つたが違っていた。

「友達が行きつけの六本木の喫茶店が開店一

周年記念のイベントで、来客者に記念プレートのプレゼントをするらしいの。これがブランドもので、彼女は5皿くらい欲しいらしいんだけど一人一皿限定なので、そこに行つてプレートだけを譲ってくれる誰かを探して欲しいと虫のいいことを頼まれたのよ。今日の夕方、その喫茶店に付き合ってもらえたら嬉しいんだけど。お願いできるかな。」

断わる理由はなかった。職場には、いつも午後八時か九時くらいまで残つて残業をしていたが、最近では仕事にも少し慣れ余裕もできてきた。今日は早めに仕事を切り上げようと思つた。

「はい。大丈夫です。」

そう答えていた。

「ありがとう。じゃあ、誠志堂に六時待ち合わせでいいかしら。」

彼女は嬉しそうに笑つたが、ぼくはどきどきしていた。

その日の夕方彼女と一緒に開店一周年記念の喫茶店に行くと、既に彼女の友人二人が待っていた。この二人共に彼女の大学時代の友人という紹介を受けたが、二人ともにぼくを値踏みするように見る目に居心地の悪さを感じた。ぼくの思い過ごしかも知れなかったが、銀行の窓

口でナンパした男と見られていたのかもしれない。記念プレートを置いてぼくは早々に退散した。

しかし、この喫茶店を契機にぼくの六本木の行動範囲が夜にも広がっていくこととなった。

それは「喫茶店のプレート」の埋め合わせということだったのか、間もなくして彼女から生演奏が入っている六本木のジャズバーに誘われた。ジャズ音楽に馴染みのなかったぼくは演奏の途中で居眠りしたら恥ずかしいなと思つて少し躊躇していたが、彼女の強い勧めもあつて承諾した。実際に演奏を聞いた時は、生演奏の迫力に驚愕した。ピアノとベースとサクソフーンとドラムの協奏であつたが、音のコラボレーションと言ふべきか、音の融合とぶつかり合いの迫力に圧倒されていた。そして、時々女性歌手のきれいな澄んだ歌声が聞こえてくると何かほつとした気分になつていて、不思議な音の世界に引き込まれていった。ぼくがこれまで聞いたことのない曲ばかりであつたが、異世界に迷い込んだ気分になつていた。夜の六本木で初めて女性と一緒に生演奏を聴いているその状況に酔っていたのかもしれない。そして、そんな経験をさせてくれた彼女に感謝の気持ちでい

っぱいで、彼女に聞こえないように「ありがとう。」と呟いていた。

彼女との初めてのランチから半年が経つていたこの頃には、彼女の出身が東京の下町であること、生まれてからずっと実家に住んでおり今は両親と妹の四大家族であること、六本木支店勤務は三年を超えたことなどを知つていた。

そんなある日、彼女からディスコに行かないかという誘いを受けた。ぼくは、学生時代にもディスコには行ったことがなくジャズ喫茶の時に上に躊躇していたが、六本木のディスコは当時有名だったので怖いもの見たさで行つてみたい気持ちが少しはあつた。

「今のディスコは決まった型のダンスやステップがあるわけではなくて、音楽に合わせて身体を動かすだけでいいんでそんなにハードルは高くないよ。最悪、人が踊っているのを見ているだけでもいいんじゃないの。そんな人もあるわよ。」

彼女に背中を押されて行くこととなった。話が決まると行動は早く、次の日にはディスコに出かけた。そこは、ディスコビルとして有名なところではなくて、小さいビルの最上階の地味な看板のビルであつた。店内はそれほど広くはなく、ダンスフロアも小さめであつた。元はス

ナックカバーだった店を改装してディスコ店にした印象であった。客層もそれほど若くはなく、ぼく達以上のサラリーマンがメインと思われた。ディスコ初心者のぼくを彼女が氣遣ってくれたのかも知れない。

気が付くとぼくは、彼女と向かい合わせて踊っていた。ステップも何も分からないぼくは、彼女の踊りを眺めながら音楽に合わせてゆっくりと身体を動かしていた。彼女の踊りはしなやかで優雅であった。まるで軟体動物を思わせるような柔らかい動きがとつてもセクシーであった。何でこんなに柔軟な身体をしているのだろうかと、ぼんやり考えながらぼくも踊っていた。

休憩できるテーブル席は、ダンスフロアと少し離れた一角にあつて、音楽の音もそれほど大きくなかった。彼女との会話にも支障はなかった。ぼくはグラスビールを飲みながら、「踊り上手ですね。どこかでダンスを習つてましたか？」

「ダンスとは少し違うけど、中学生までクラシックバレエを習つた。そして、挫折して止めた。」

そう言って笑つた。その時、急に照明が暗くなりスローテンポの音楽になった。ダンスフロア

アで踊っている人が入れ替わるのが遠目に見えた。後で聞いた話では、当時のディスコでは「チークタイム」と呼ばれている一時間に一回くらいの割合でチークダンスを踊る時間帯があつたらしい。ダンスフロアでチークダンスを踊っているカップルをよく見ると、身体を密着させて踊っていた。ぼくが彼女の方に向き直ると、彼女は、「ああ」という表情をして言った。

「一緒に踊る？」

断る理由はなかった。

ぼくは、踊っている人達と同じように彼女の腰に手を回し、彼女はぼくの背中に手を回して身体を密着してきた。ぼくは彼女の柔らかい身体の体温を感じながら、緊張感と恥ずかしさでいっぱいになった。腰に回した手は震えていたかもしれない。ディスコに誘ってくれた彼女にまたしてもぼくは感謝していた。

それ以外にも、ぼくが大学でロシア語を専攻していたことを話していたこともあつて、六本木の「俳優座」でチェーホフ原作の「桜の園」が公演された時に、チケットを手配して一緒に見に行ってくれた。プロの演劇を初めて見たぼくは、その迫力に感動したというよりも驚嘆していた。こんな世界があるのかという驚きであった。文章として書かれた文字とは違ったロシア

ア文学の受け取り方があることを改めて知つた。

それから暫く経つたある日、有名な焼肉レストランで彼女とランチをしていた。彼女は世間話のひとつでもするように話し始めた。

「この間ね、副支店長が私にお見合いの話を持ってきたの。相手は本店勤務の元部下らしいんだけど、優秀な男なので是非一度会つてくれというのよ。お見合いなんて、したことないからどうしようかなと思つているのよ。」

ぼくはお見合いの意味することを全く理解していなかった。軽い気持ちで回答していた。「いいんじゃないですか。若い時にいろんな人に会うということはその人の財産だと思えますよ。もしかしたら、次の職場で一緒になるかもしれないし。」

お見合いをして断つたり断られたりした後、一緒にの職場になることがどれ程残酷なことか考えていなかった。それ以上に、彼女がどうしてそんなことをぼくに相談してきたのかを想像することもできなかった。そんなぼくの不用意な言葉に怒りもしないで彼女は、「そうね。」とだけ言って、その話題は終わった。

しかし、お見合いの話は終了していなかった。その後もランチの度に、お見合いが進行してい

た。母親にお見合い相手の履歴書を見せて相談したこと、副支店長にお見合いの話了承したこと、丸の内のレストランに副支店長が相手の男性を連れてきて会ったことなどを教えてくれた。ぼくは心穏やかではなかったが、それを止める術も経験も持ち合わせてはいなかった。ただ傍観するしかなかった。しかし、彼女のぼくに対する態度は少しも変わらずにランチを続けていた。ぼくと彼女の関係に変化はなかったので安心していった。

その日もテレビによく出演するシェフの中華料理の店でランチをとっていた。

「来月、俳優座でまたロシアの『三人姉妹』という演劇が掛かるらしいのよ。この間の『桜の園』の評判が良かったのでまたロシアものをやるみたい。また、チケット取っとこうか。」

ぼくは、前回の『桜の園』の感動を思い出しながら、うんうんと頷いていた。そして、ぼくが先週参加した今年度採用事務官の自衛隊現地研修で、「落下傘降下訓練」という十一メートルある鉄塔から飛び降りるバンジージャンプのような訓練の恐怖体験を話した。この高さは恐怖心を持つ最初の高さだと担当者から説明されていたので、飛び降りる直前には最高に怖かったと言った時、大笑いされ、ぼく達の関

係は良好そのものであった。

事件は、その帰り道で起こった。六本木交差点に向かう歩道で、昼食を終えたと思われる三人組の男性がビルから出てくるところで、その一人がぼくを凝視していた。誰だろうかと思っただが、防衛庁の知った顔ではなかった。その顔が怒気を含んでいることに気付いた時、男の視線がぼくから彼女に向いているのが分かった。彼女の方に振り返ると、「やばい。」と一言発すると足早にその場を離れ始めた。ぼくも急いで追いかけてしようとしたが「副支店長がいる。」と早口で喋ると、さらにぼくから離れていった。副支店長がお見合いの首謀者だということに気付くのに時間はかからなかった。

その後、一カ月以上経っても彼女からの連絡はなかった。いつも彼女からぼくの職場に電話がかかってくるので、ぼくから電話をかけることはなかった。それは、彼女の仕事が銀行窓口なので、ぼくから銀行に電話しても接客中で電話に出てもらうのは迷惑かなと思っていた。また、彼女の自宅の電話番号も教えてもらっていなかった。その必要もなかったのだ。よく考えると、ぼくと彼女の関係は一方通行であった。ぼくの胸はぼっかりと大きな穴が空いた気分であった。憂鬱な気持ちが続くうちに、もし

かしたらこれが失恋なのかと思ったが、何かちよつと違う気もした。今年の四月からぼくは社会人になり、自由奔放に暮らしていた学生時代から急に時間に縛られる社会人の毎日となっていた。大きな組織の中で何もできない無力な自分に戸惑ってもいた。そんなぼくに手を差し伸べてくれた彼女はぼくの救世主であった。一方的に助けてくれる関係は恋愛とは言えない。そうならば、失恋というのはおこがましい。「やっちゃえ、やっちゃえ」と言っただけを見知らぬ世界に誘い出してくれた彼女、そして六本木の街を垣間見せてくれた彼女、人生の豊かさを教えてくれた彼女、ぼくは彼女に感謝することはあっても恨みに思うことは何もなかった。それにしても、この息苦しさは何なんだろう。やはり、ぼくは何か大事なものを失っていた。

ぼくの生活は相変わらずで、朝早くから夜遅くまで拘束される毎日が続いていた。六本木の街はクリスマスが近づき、街の喧騒具合に一層拍車がかかっている気がした。そして、彼女と一緒に観ると約束した俳優座の『三人姉妹』の公演が始まっていた。(了)